

もう二度と、あなたの妻には
なりたくありません

く死に戻った嫌われ令嬢は幸せになりたいく

登場人物紹介 Characters

エドガー

巻き戻る前のフローラの夫。
容姿端麗で
人気者の公爵。
逆行後、なぜかフローラに
接触してきて……？

フローラ

本作の主人公。
夫の浮気相手に
毒殺されたと思ったら、
婚約前に逆行していた。
以前の人生と同じ結末を
迎えないことが目標。

キャロル

忠実で優秀な侍女。
巻き戻る前も後も、
フローラを一番に心配している。

ナターシャ

巻き戻る前の
エドガーの浮気相手。
執拗にフローラに
嫌がらせをしており、
最後には毒を飲ませて
殺した。

ウィルソン侯爵

フローラの父。
巻き戻ったフローラの態度に
困惑しつつ、
優しく接している。

プロローグ

「そ、そんな……そんな馬鹿な……」

手足に力が入らず、目の前の景色が揺らぐ。

思わずよろめきテーブルに手をついたことで、その上に置いてあった花瓶がガシャンと音を立てて床に落ちてしまった。

しかしそんなことを気にかける余裕は、もう今の私には残っていない。
力なく床に横たわった私は、両腕を投げ出した。

——なぜ、私に毒が……？ それにあの毒で死ぬことはないはずなのに……

「フローラ様……あまりに浅はかな行い、あなた様らしくありませんね」

ぼやける視界の中で意地悪く笑うのは、コルドー公爵である夫エドガー様の愛人ナターシャだ。
彼があればど愛し合った私を捨てて、その愛を彼女へと捧げるようになったのは一年ほど前のこと。

偶然の出会いを果たした彼らの愛が盛り上がるまでにそう時間はかからず、すぐにナターシャはエドガー様のたつての希望でコルドー公爵家に召し上げられた。

裕福な子爵家出身の彼女は、表向きは私付きの侍女として……しかしその実は彼の愛人として迎え入れられたのだ。

もちろん彼女が正妻である私のことを敬うはずもなく、侍女としての業務に手をつけることもない。にもかかわらずエドガー様はそれを咎めることもせず、ただひたすらにナターシャの色香に溺れていた。

私が同じ部屋にいるというのに、人目も憚らずに口づけを交わす二人の姿を、何度見せつけられてきたらうか。

たった一年の間に、彼の心は全てナターシャのものになってしまったと言っても過言ではない。

当然のことではあるが、私の元へエドガー様が通うこともなくなり、夫婦の寝室は私一人だけの寝室へと姿を変えた。閨を共にすることがなくなった私は、コルドー公爵家の跡継ぎを産むこともできなくなったのだ。

そして次第に公爵からの愛を失った私の存在はないものとされ、屋敷の者たちもナターシャを新たな女主人として認め始めるようになってしまったというわけである。

——もしもナターシャに、子どもができてしまったならば……

私が一番恐れていたこと、それはナターシャがエドガー様の初めての子を産むことだった。

かつて二人で濃いほどに甘い時間を過ごし、私に持てるだけの愛を囁いてくれていた彼の心変わり、私の心はついていくことができなかった。

きっとこのエドガー様の恋慕は一時的な気の迷いで、いつかコルドー公爵家の跡取りを産むのは

私の役目であるという自負に、これまで支えられてきたのだ。

しかし月日が経つごとに彼のナターシャへの思いは減るところが増していく一方で、むしろ私の存在がエドガー様の中から完全にかき消されていくのがわかった。

彼の瞳は虚ろで、そこに私の姿が映されることはない。

いつだって映るのは、ナターシャがわざとらしい上目遣いで彼を見つめる姿だけ。

既に体の関係もあつたであろう二人の間に、子どもができてしまうのは時間の問題だった。

ナターシャが身籠もれば、その腹の子は真正正銘のエドガー様の子であると同時に、コルドー公爵家の正當な跡取りとなってしまう。

そうなれば正妻とはいえ、エドガー様からの愛を失い子を持たない私など、もはや厄介者と成り下がるだろう。

……いや、もう既にそうなりつつあるのかもしれない。

『跡取りを産むことのできないフローラ様は、公爵夫人にふさわしくありませんわ。いつか私の元にエドガー様の子が宿ってくれたなら……きっとあなた様は用済みになってしまいますわね』

不安を抱えていた私に、とどめを刺すようなナターシャの発言だった。

まだ子を宿していない下腹を撫でながら、得意げに笑ってそう告げる彼女の姿が憎らしくて、悔しくて、悲しくて……

その晩、私は涙が枯れるほどに泣いた。これ以上涙は出てこないのではないかと思うほどに、抱え込んでいた感情が次から次に溢れ出してきたことを覚えている。

ナターシャは、それ以外にも私に対して執拗な嫌がらせを続けていた。かつてエドガー様から贈られた首飾りや指輪を勝手に持ち出され、それらはもう二度と私の手元には戻ってこなかった。

舞踏会の中でもわざと私に恥をかかせるような真似を繰り返し、いつしか私は社交界でもその居場所を失いつつあったのだ。

しかしそれでも、彼女の振る舞いをエドガー様が咎めることはない。

夫の支えを持たない公爵夫人など、この国では名ばかりの存在だ。

このような状況でナターシャに子ができたならば……そんなことを考えるだけで気が触れてしまいそうになる。

もう、私の心は限界であった。

やがて朝から晩までその不安が頭から離れなくなり、私は一日中人目を避けて自室に引きこもるようになった。

部屋の中へと通すのは、私の身の回りの世話をしてくれている侍女のアリアだけ。

その頃には、エドガー様は夫婦の寝室と通じている自室を使用することはなくなり、わざわざナターシャの部屋の隣に自分の部屋を設けて、そこで毎日過ごすようになっていた。

もう、引き返すことのできないところまで来てしまったのだ。

エドガー様の愛を失ってしまっただけでもその苦しみは甚だしいというのに、その上私が手にすることのできなかった彼の子を、ナターシャが抱く姿を目の当たりにするということのか……

その焦りと恐怖が、私を変えてしまったのである。

——ナターシャが、子を産むことのできない体になれば……

そんな恐ろしい願望が心の中で渦巻き始めたのは、いつ頃からだっただろうか。

たとえもうエドガー様の寵愛が戻ってくることはなくとも、ナターシャに子が産まれることがなければ……

いつか氣を落ち着けて、遠くから二人を笑って見守ることができるようになるかもしれない。

しかし彼女が子を産んでしまったならば、私は嫉妬と憎しみの渦に呑みこまれてしまうだろう。

自らの内に秘めた醜い感情が、いつのまにか破裂してしまいそうなほど膨れ上がってきたことに私は気づいている。

もうこれ以上指を咥えて、二人の仲睦まじい姿を見ていることはできない。

こうして私は、エドガー様とナターシャの間に子が生まれぬよう、彼女に毒を飲ませる方法を思いついたのである。

その企みが、後に悲劇を生むことなど知りもせず……

第一章 もう二度と、あなたの妻にはなりたくありません

この国では、魔術信仰が盛んだ。

王都から少し離れたところにある森の入り口に、魔術師たちがひっそりと店を構えているのは有名な話である。彼らは簡単な魔術から複雑なものまで、その報酬に応じて客の希望に応えてくれるのだ。

決行の日は、エドガー様とナターシャ様が二人で観劇へと出かけた日。

森と劇場は正反対の位置にあり、彼らの帰宅は夜遅くなることがわかっている。

今日を逃せば当分機会はないだろう。

私は金貨を袋に詰め込み、秘密裏にその店を訪れた。

コルドー公爵夫人ともあるう者が、そのような場所を訪れていることが知られてしまつては、私の立場が危うくなつてしまう。

伴の者はごくわずかに、ヴェールを頭から被り顔を覆い隠すようにして素性を隠した。

店にいた魔術師は同じくヴェールを深く被った女性であり、その素顔は全くわからない。

私は彼女に掻い摘んだ事情を話し、ナターシャに子ができなくなるような術をかけてもらえないかと頼んだのである。

当初その頼みに対し、魔術師はあまりいい反応を示さなかった。

「人の道に反することをなさる覚悟はおありですか」

その言葉の意味が私の心に重くのしかかり、一瞬だけ決意が揺らぐ。

しかしその瞬間脳裏に浮かんだのは、エドガー様とナターシャが幸せそうに見つめ合いながら微笑む姿。

彼は私と恋に落ちて将来を約束し、結婚式で永遠の愛を誓ったというのに……

私に愛を囁いてくれたかつてのエドガー様は、もういない。

私がこの一年で変わってしまったのと同じように、彼もまた以前とは別人に変わってしまったのだろう。

——今さら後戻りなど……

いつそのことナターシャの命を絶つてしまえばいい。そうすれば、エドガー様は再び私の元に戻ってきてくれるかもしれない……

そんな最悪の考えが頭の中をよぎったこともあったが、なぜかその考えを現実にしようとは思えなかった。

彼女を子どもが産めない体に変えてしまったところで、エドガー様が私の元に戻ってきてくれるかはわからない。しかしナターシャの命の灯火を自らの手で消し去るような真似は、とてもではないができたのだ。

「……そのような道は、既に踏み外してしまいました」

これが、先ほどの問いかけに対する私の答えである。

あの二人の關係に嫉妬し憎しみを抱き始めた瞬間から、既に私は高潔な公爵夫人などではない。もはやこれ以上、墮^おちるところなどないのだ。

私の答えを聞いた魔術師は一度だけ頷くと、何やら小瓶を開けて角砂糖のように見える白いものを取り出した。

そしてそれをテーブルの上に敷かれた布の上に広げると、別の小瓶に入れられた紫色の液体を上から振りかける。同時に何やらぶつぶつと呪文を唱え始めた彼女であったが、次の瞬間……

「えっ……確かに紫色だったはずなのに……」

私はこの目で初めて見る魔術に釘づけとなった。

みるみるうちに液体が色をなくして、白い物体の中へと吸い込まれていくではないか。

そして先ほどと全く変わらぬ見た目のそれを、彼女は指で摘んで元の小瓶へと戻していく。

やがて全て詰め終えてコルクの栓を閉めると、ゆっくりと私の方にそれが差し出された。

「見た目も味も、砂糖と同じでございます。この中にあるもの全てに術がかけられておりますので、こちらを飲み物に溶かすなどして相手に飲ませてください」

「全て飲まないと効果は得られないの？」

「いいえ。一粒で十分な効果が得られます。数が多いのもしも失敗してしまった時のため……予備のものでございます」

なるほど、ナターシャが思い通りにその毒砂糖を口に含んでくれるかは確かにわからない。

少しくらい金額が上がっても、万全の対策をしていた方が安心だろう。

——私ったら。何を考えているのかしら……

人を不幸に陥れるための方法を、これほど真剣に考えて模索している自分の姿が滑稽^{こっけい}で、哀れで、自嘲気味に笑ってしまう。

「……ありがとうございます。それで十分です。お代はいくらになるかしら？」

私は後ろで控えていた伴の者に目配せし、金貨の入った袋を受け取った。

この国のひと月の賃金は、平均して銀貨三十枚ほどだと聞いたことがあるが、なんせ今回は特別に危険な術だ。それを遥かに上回る額が必要なことくらいは予想済みである。

「本来ならば金貨五枚というところなのですが、今回の術はかなり複雑で危険なもの……さらに金一枚を足していただければと」

「そう。わかったわ、金貨六枚ということね」

言われた通り麻袋の中に手を入れて、必要なだけの金貨を取り出す。

私はコルドー公爵夫人である前に、元ウィルソン侯爵家の娘だ。

持参金を含め、自分で自由に使うことのできる資産なら十分に持っていた。

今回の代金も、私にとっては簡単に支払うことのできる額である。

ただ、どんなに金を積んだところで手に入れることのできないものが、人の心というもの……

実は先ほどナターシャに術をかけてほしいと依頼をした際に、エドガー様の気持ちを私の元へ戻すような術をかけることは可能かと尋ねてみたのだ。

しかし、魔術師にはきつぱりとそれを断られてしまった。

『人の心ほど移り気なものはございません。今術をかけたとしても、その効果は一時的なものでございます』

確かに術で一時的に彼の気持ちを取り戻したところで、またナターシャのような存在がいつ現れるかわからない。

彼女曰く、永遠に相手の心を縛りつけておくことのできる術もあるようなのだが……それはさらに危険な術であり、相手は抜け殻のようになってしまいかもしれないと話していた。

そのような状態でエドガー様をそばに縛りつけておいたところで、果たしてそれは本当に幸せなのだろうか。私が望む未来なのだろうか。

そしてそれほどまでに危険な術を頼む気概も、私にはなかったのである。

私は提示された額をテーブルの上に置いた。

魔術師は長い黒塗りの爪で金貨を数えて頷くと、それを引き出しの中へと仕舞い込む。

手に入れた毒砂糖入りの小瓶は、伴の者には渡さずに大切に自らの外套の中へと隠した。

万が一どこかで落としてしまったならば、大変なことになるだろう。

屋敷の自分の部屋に着くまで、しっかりと自らの手で持つて帰るのだ。

そんな覚悟を決め、外套の上から小瓶を守るように手を当てる。

代金を支払い、無事に毒も手に入れた。

そうとなれば、一刻も早くコルドーの屋敷へと戻らなければならない。

この店に長居するのはあまりよくないだろう。

「無理を言ってしまうし訳ございませんでした。助かりましたわ、ありがとうございます」

私は魔術師に向けて軽く頭を下げると、くると体の向きを変えて入り口の方へと足を進める。すると、背後から突然声をかけられた。

「お気をつけください。人間というものは、想像以上に恐ろしいものです」

なぜ彼女がそのようなことを言ったのかはわからなかったが、ひとまず私はその忠告に頷くと店をあとにする。

外に出ると、そこは相変わらずの雪景色だった。

その真つ白な光景が、どうしようもなく私の心に虚しさを与えてくる。

——誰かに毒を盛ろうだなんて……

自分がこれほど恐ろしいことを考える日が来ようとは、思いもしなかった。

確かに彼女の言う通り、人間というものは内に恐ろしいものを秘めているのかもしれない。

それからというもの、いつナターシャにこの毒砂糖を飲ませるか、そのことしか考えることができなくなった。

いつもなら彼らの放つ甘い空気に反吐が出そうになり、居場所もなく自室で鬱々とした日々を過ごしていたというのに……

そのようなことも気にならないほどに、私の頭の中は決行の日のことではいっぱいだったのだ。

そしていよいよやってきたその日。

今日はエドガー様が領地の視察のため、朝から晩まで屋敷を留守にすることが決まっている。つまり屋敷には使用人たちの他に、私とナターシャしかないのだ。

やるなら今日しかない、そう思った私は彼女をお茶へと誘うことにした。

しかし好都合なことに、なんと向こうの方から誘いがやってきたではないか。

普段はエドガー様が離れることなくそばに張りついているため、なかなか彼女と二人きりの時間を持つことはできない。

この後に待ち受ける重大で危険な任務に震えてしまいそうになりながらも、私は平静を装って支度を整えていく。

ナターシャの方から誘いを受けたものの、場所は私の部屋がいいだろう。

そうでなければ、あの砂糖をうまく彼女の飲み物の中に溶かすことが難しくなってしまう。

そんなことを考えて行動している自分の変わり果てた姿に虚しさが襲いかかるが、今はそのような感傷に浸^{ひた}っている場合ではないのだ。

私付きの侍女であるアリアに用意してもらった温かい紅茶……あえてティーポットは二つ用意させ、ナターシャの方に例の砂糖を一粒だけ落とした。

中へと転がり落ちた砂糖はじわじわと溶けていき、やがてその姿を完全に消す。

甘味があるだけで無臭であると聞いてはいたものの、なんだか不安になってしまつてひと際^{きわ}香り高い種類の茶葉を選んでいた。見た目からは毒が溶け込んでいるとは思えない、普段通りの色鮮や

かな紅茶があつという間に出来上がる。

怪しまれぬように、ナターシャが席についてからアリアにこれを注いでもらうのだ。

アリアは口数の少ない侍女ではあるが、結婚当初から私付きとして仕えてくれており、この屋敷の中で数少ない信頼できる者であった。

先日魔術師の元を訪れた際にも、彼女は付き従ってくれている。

果たして先日の店での会話が、奥に控えていたアリアに聞こえていたのかはわからない。

だがもはやそのようなことも、どうでもよかった。

とにかく一刻も早く、この地獄のような苦しみから抜け出さなくては必死だったのだ。

やがて昼食を終えたナターシャが、私の部屋へとやってくる。

……エドガー様からもらった数々の装飾品たちを身に着けて。

そんな何気ない行為の全てが私の心に癒^いえない傷をつけていることに、彼女は気づいているに違いない。

それをわかっていて、あえてそうしているのだ。ナターシャとは、そういう女なのだから。

「お招きいただきありがとうございます。私の方がお誘いしたというのに、申し訳ございません」
甘い声でそんなことを告げた彼女は、アリアに促されてソファに腰掛けた。

長い金色の巻き髪がはらりと肩から落ちていく様子に、不意に過去の記憶が頭をよぎる。

あれはエドガー様と結婚する前のこと……

『私、自分の髪の色は嫌いです。もっと華やかな……そうですね、輝くような金色の髪に憧れますわ』

両親共に暗色の髪を持つ私は黒髪で、この漆黒の色が幼い頃から不満だった。髪飾りをつけてもあまり映えず、顔周りの印象も暗くなってしまうように感じていたのだ。

しかしある日いつものようにこんな不満を漏らした私に対し、かつてのエドガー様はこう告げた。『君のように美しい黒髪は見たことがないよ。月明かりで艶めいて、思わず触れたくなってしまう』

『エドガー様……』

『今度黒髪に似合う髪飾りを贈ろう。きっと美しいはずだ』

彼はそう言って微笑むと、私の髪に優しく唇を落としてくれたのであった。

「フローラ様？」

突然かけられたその声に、ハッと意識を取り戻して正面を見れば、わずかに首を傾げてこちらを見ているナターシャと目が合う。

——いけない、なぜこのような昔のことを……

すっかり忘れていた彼との甘い日々の記憶が突然蘇り、必死にそれを頭の中から追いやるようにする。もうあの頃の彼はいないというのに、私一人だけが過去の世界に取り残されたままなのかもしれない。

だがこれから私は、人の道に外れたことをおこなうのだ。

エドガー様やナターシャよりも、さらに成り下がった人間になってしまうことだろう。

本当に後悔はないのか？

そう自分自身に問いかけるが、もう後戻りはできないところまで来てしまった……というのが答えであった。

「ごめんなさい、お待たせして……今お茶を淹れますわね」

気を取り直してエリアに指示を出し、私もナターシャの正面へと腰掛ける。

そしてナターシャのティーカップに紅茶が注がれたことを確認すると、私の前に置かれたティーポットを持って自らのカップに中身を注いだ。

「とてもいい香りです」

「それはよかったですわ。今日のためにとびきり香りのいい茶葉を用意しましたから」

「まあ、わざわざありがとうございます」

ぺらぺらとそんな出まかせを口にする自分に驚く。

ああ、自分はこれほど浅ましい女であったのかと……

紅茶は怪しいものではないとナターシャに証明するためには、まず自分が口に含んで彼女を安心させた方がいいだろう。

そう考えた私は、未だ^{いまだ}ティーカップに手を伸ばさない彼女を急かすかのように、自分からカップを手を取った。

そして、そのまま数口続けて紅茶を口に含む。

途端に広がる華やかな香り。しかし砂糖の入っていない渋味のある紅茶……のはずが、なぜかそれは痺れるほどに甘かった。

——え……？ 変ね、私の方の紅茶には砂糖を入れていないはずなのに。そんなことを考え始めた途端、急に眩暈がし始めて気分が悪くなった。思わず口を手で押さえて顔を背ける。

「フローラ様？ いかがなさいました？ ご気分でも？」

のんびりとした甘い声でこちらの様子を窺うナターシャは、未だに紅茶には手をつけていない。そしてその心配そうな言葉とは裏腹に、彼女の表情には笑みが浮かんでいた。

まさか私は毒の入った方の紅茶を飲んでしまったのだろうか？

しかしそんなことはありえないはずなのに、なぜ……

「つ……なんでも、ありませんわ……少し眩暈がしただけで……」

「ですが、お顔の色が悪いように見えますわ」

「いえ、すぐに……落ち着きますから……」

たとえあの毒を私が誤って飲んでしまったところで、命を奪われることはない。あの術の効果は飲んだ者が今後身籠ることを妨げるというものだけで、命を危険に晒すことはないからだ。

——罰が当たったのかもしれない。

一体いつのまに、ティーポットが入れ替わってしまっていたのだろうか。

気分が悪いせいでまともな思考が働いておらず、そんなことをぼんやりと思った。

ナターシャから生まれるかもしれない未来の命たちを、この手で絶とうとするような真似をしてしまったから……神は私の方に罰を与えたのだろうか。

これで私は、一生子を望めぬ体となってしまった。

だがどうせエドガー様が私と閨を共にすることなどないのだから、これでよかったのかもしれない……

「つ……」

すると今度は、突然ドクン！ と激しい動悸がして、胸を貫くような痛みが走る。

思わず胸に手を当てた私は、立ち上がって部屋を出ようとした。

この無様な姿を夫の愛人に見られるのは、公爵夫人としてのプライドが許さなかったから。

しかし手足に力が入らず、足元がおぼつかないため思うように歩くことができない。

よろめきながら体重を支えようとテーブルに手をつこうとするが、バランスを崩して倒れこんでしまった。

その衝撃で花瓶が床に落下し、ガシャンと大きな音を立てて砕け散る。

だが今の私には、それを気にかかる気力はもはや残っていないかった。

——おかしいわ。あの術でこのようなことにはならないはずなのに……

単に子ができなくなるだけのはずが、ここまで肉体的、精神的に苦痛を与えるものであったのか。あの魔術師も、ずいぶんと意地の悪い術を使っただけ……

「フローラ様……あまりに浅はかな行い、あなた様らしくありませんね」



ぼうつとそんなことを考えていた私の頭上から、嘲笑うかのような高い声が聞こえてきた。そちらの方を見上げたいのだが、力が入らないためそれができない。

——ナターシャ……？

声の持ち主であるナターシャは、そんな私を憐れむかのように屈んで目線を合わせてくる。

「私は知っておりました。あなた様の企みも、私のことを憎んでおられるということも」

そう言っただけ微笑む彼女の姿は、美しい悪魔のようであった。

「な、なぜ……そ、の、よう、な……」

聞きたいことはたくさんあるというのに、思うように声が出てくれない。

口について出るのはしゃがれて掠れた、まるで女性のものとは思えないような情けない声だけ。

「私がエドガー様の子を産むことが、そんなに許せませんか？」

「っ……」

彼女は、私が毒を盛ろうと企んでいたことを知っていたのだ。

知っていて、あえてお茶の時間を共に過ごそうと声をかけてきたのである。

そうとも知らずにのこのこと誘いに応じ、自分の部屋に招くことで優位な立場にいと勘違いしていた自分のなんと愚かなことか……

「それほど許せないとおっしゃるのなら、見なければよろしいのです」

突然ナターシャの声が、それまでの甘いものから恐ろしく低いものへと変わったような気がした。

「これから先私たちの間に子が生まれたとしても、あなた様がここにいらっしゃらなければその姿

を見ることがないでしょう?」

「何を、言って……」

なんとなくナターシャが言わんとしていることの意味がわかった私は、その予想が外れていることを願いつつも、恐怖と毒のせいで体の震えが止まらない。

——まさか、彼女は……

「そこまで苦しまずに逝けると聞いておりましたが、少し話が違ったようですわ。申し訳ございません」

「つ……」

私はここへきてようやくはつきりと悟った。

ナターシャは、私が飲んだ紅茶の中に毒を混ぜていたのだ。それも命に関わるほどの強いものを。一体何がどうしていつのまに、私の紅茶の中に毒が入れられてしまったのだろうか……

しかしもうそんなことを考えていても仕方のないこと。まさか毒が仕込まれているとは思わず、むしろナターシャに安心してもらうために、何口もその毒入り紅茶を飲んでしまったのだ。

既にその毒は、私の体中に回り始めていることだろう。

その証拠に動悸や息苦しさ、手足の痺れと震えはどんどん悪化していた。

もう会話することなど難しいほどになってしまった私の様子を、憐れむように扇子を口に当てたナターシャがじつと見つめている。

——ああ、苦しい……早く楽になりたい。

私はあまりの苦しさから早く解放されたくなり、命を手放しても構わないとさえ思い始めるようになった。

命を失えば、意識もなくなる。エドガー様とナターシャの様子に一喜一憂し、心が挟られてしまうことももうなくなる。幸せな思い出だけを胸に抱いて旅立つことができるのだ。

——心残りは一つだけ。

最期旅立つ前に、エドガー様に会うことができなかったということだろうか。

たとえこちらを見つめる瞳に愛が残っていなくとも、最期にその姿を目に焼きつけておきたかった……

きつとナターシャは、私が彼女の紅茶の中に毒を仕込もうとして失敗したのだと、エドガー様に嘘をつくだろう。

あながちそれは間違った話ではないのだが、彼の中で最後に残る私の記憶がこれになってしまうというのは、なんだか虚しい話だ。

——でもそれももう、死んだ後の私にはわからないこと。

それならば、ある意味ここで命を奪われてしまった方が楽になれるのかもしれない。

いつのまにか毒は全身に回ったようで、もうこれ以上命を繋いでおくことは限界だとわかり、瞼を閉じてしまいたい衝動に駆られる。

きつとここで目を閉じたなら、そのまま二度と目覚めることはないだろう。

「フローラ様……来世ではあなた様だけを愛してくださいる方が、見つかりますように」

どの口が言っているのだろうか、という台詞が聞こえたような気がするが、もうどうでもいい。もはや彼女に対して、怒りも憎しみも感じなかった。

——さようなら、エドガー様……もしも人生をやり直せたなら……
私はゆつくりと抵抗を止めて瞼を下ろす。

途端にこれまでぼやけていた視界が真つ暗になり、意識が遠のき始めた。

——もう二度と、あなたの妻にはなりたくありません。

薄れゆく意識の中でそんなことを思いながら、私の命の灯火はかき消されてしまったのであった。



「んん……」

目が覚めると、見覚えのある花柄の天井が目に入る。

しかしそれはコルドー公爵家の自室のものではなかった。

そしていつも左手にはめていたはずの結婚指輪の姿はなく、結婚前の年若い令嬢が身に着けるようなネグリジェを身に纏^{まと}っている。

「私は……死んだはずでは……」

確かあの時、私はナターシャに毒を飲まされたはず。そしてものがき苦しんだところまでは覚えて

いるのだが、そこから先はあまりの苦しさで意識を失ってしまったせいで覚えていない。

ゆつくりと寝台から体を起こしてみるが、体調も良好で毒の後遺症のようなものは感じられなかった。

あれはまさか全て夢だったのか？ いや、そんなはずはない。

私の記憶の中には、幸せだった結婚生活が苦しみへと変化していくまでの過程にくわえ、魔術師とのやり取りに至るまでがしっかりと残されていた。

確かに私はエドガー様と結婚していて、ナターシャに陥れられたのだ。

周りを見渡せば、よく見慣れた調度品の数々。やはり私が生まれ育った部屋に間違いない。

——ここは、ウィルソン侯爵家……？ でもそれはありえないわ。

実家であるウィルソン侯爵家には、もうしばらく帰っていないかった。

あれほど祝福されたエドガー様との結婚が、うまくいかなくなってしまったことが惨^{みじ}めで申し訳なくて……

そして私が実家へと戻ってしまったら、ますます公爵家でのナターシャの存在が大きくなってしまうのではないか、ということが怖かったのだ。

すると突然扉が軽く叩かれ、次の瞬間にはゆつくりと開かれる。

開いた扉から一人の女性が部屋の中へと入ってきたのだが、その女性に目を向けた私は心臓が止まるほどの衝撃を受けた。

「ああ、フローラ様。お目覚めでございますか？ 声をお掛けしたのですがあまりに起きていらつ

しやらないので、侯爵様から『起こしてくるように』と申しつけられた次第でございます」

女性「勝手に扉を開けてしまい申し訳ございません」と、頭を下げながら寝台まで歩みを進めた。

「あなたは……キャロル？」

キャロルは、幼い頃から私の世話をしてくれたウィルソン侯爵家の侍女だ。

だが彼女はここにいるはずがない……エドガー様との結婚により、離れ離れとなってしまうたはずであった。

その懐かしい顔に嬉しくなり、つい涙ぐんでしまう。

オレンジ色の髪を後ろで編み込む形に纏めた彼女は、突然涙を浮かべながらそんなことを尋ねてきた私に対し、怪訝けげんそうな顔で首を傾げた。

「まだ完全にお目覚めではないのですか？ ……私は確かにキャロルでございますよ、あなた様付きの侍女の」

「……ということはこは、ウィルソン侯爵家なのね？」

キャロルは今度こそ呆れたような、むしろ心配そうな表情をこちらに向けてきた。

「昨夜何か変なものをお召し上がりになりましたか？ それかご気分でも……」

「い、いえ！ 少し変な夢を見たようで……夢と現実が混ざっているみたいね。キャロル、今私は何歳なのか教えてほしいわ」

「……先日十八歳になられたお祝いをしたばかりではございませんか。お嬢様、本当に大丈夫でござ

いますか？」

……ということは、私が毒を飲まされて命を落としたあの日から四年ほど遡さかのぼったことになるだろう。

今の私は十八歳になったばかりのウィルソン侯爵令嬢なのだ。

私とエドガー様は出会ってから約一年後に結婚して、その二年後にナターシャと彼が出会いを果たすことになる。

キャロルの服装が涼しげな半袖であることを考えると、今の季節は恐らく夏頃だろう。

私がエドガー様と出会ったのは、すっかり朝晩が冷え込むようになった頃の舞踏会だったことを覚えている。

……つまり私たちはまだ出会っておらず、互いの存在を知らないということになるだろう。

「……フローラ様？ いかがなさいましたか？ やはりお加減が……」

明らかに様子のおかしい主人に対し、キャロルはいささか不気味なものを見ているような目つきだ。それもそのはずだろう。いつものように就寝して目覚めた主人が、突然場所も年齢もわからなくなっているのだから。

「いいえ大丈夫。だんだんと意識がはっきりしてきたわ。きつと目が覚めてきたのね」

そんなことを言って誤魔化すと、キャロルはほっとしたようにため息をついた。

ようやく寝台から降りてきた私に対し、彼女はドレッサーの前に置かれた椅子へと座るように促す。椅子に腰掛けて正面の鏡を見れば、そこには記憶の中に残る姿よりも少し幼い自分の姿が映っ

ていた。

——眉間の皺も、目元の隈も見当たらない……

目元に手をやりながら、ふとそんなことを考える。

表情も最後に残る記憶よりは、いくらか明るく見えるのは気のせいだろうか。

思い返してみれば、ナターシャが公爵家にやってきてからというもの苦悩の連続であった。

常に二人の関係を気に病み、気づけば険しい顔をしていたことを思い出す。

彼女に毒を盛る計画を企てていた時の私の顔といったら……さぞ醜いものであったに違いない。

まだエドガー様と出会う前の私は、これほど別人のように生き生きとした表情を見せていたのかと、自分がまるで他人のように感じられた。

「お着替えを手伝ってもよろしいですか？」

「あ……え、ええ。お願いするわ」

今度は鏡を見たまま動かなくなった私を見かねたのか、キャロルが手助けすることを提案してくれる。

窓の外を見ればとつくに日も昇っており、時刻は昼に差し掛かっているのだろう。

にもかかわらず寝癖のついたボサボサの髪に、未だにネグリジェを身に着けたままの私を、キャロルはどう思っているのだろうか。

そんなことを考えながら、彼女の手で長い黒髪を梳いてもらう。

——懐かしいわ。結婚する前は、こうして毎日キャロルに髪の毛を梳かしてもらっていたのよね。

鏡越しに見えるキャロルは、私が嫁いだ時の彼女のままだ。

彼女がその後もずっとウィルソン侯爵家で侍女をしていたことは知っていたが、結局嫁いでからというものの一度も顔を合わせたことはなかった。

昔と変わらぬ彼女が目の前にいるだけで胸がいっぱいになってしまい、その動揺を悟られぬように思わず俯いてしまう。

「今日は後ろで編み込んでしまいますね。随分と寝癖が頑固ですので……こうすればわかりにくくなりますでしょう？」

「本当？ 嫌だわ……」

「ふふふ。お嬢様の寝癖をお直するのは時間がかかりますからね」

そんな軽口でさえも、嬉しくてたまらない。

いかにこれまでの結婚生活が苦しみに満ちたものであったか、その全てから解放された今よくわかる。

思い返せばコルドー公爵家の侍女たちも、嫁ぎ先に慣れない私によくしてくれていた。

……ナターシャがああ屋敷に連れてこられるまでは。

しかしどうしても公爵家特有の息苦しさというものがあり、嫁いでしばらくは慣れずに息が詰まるような思いをしたことは今でも記憶に新しい。

「そういうえば、舞踏会のこと侯爵様からお聞きしていますか？」

やがてひと通り梳かし終えた黒髪を編み込みながら、キャロルがふと思いついたように尋ねて

きた。

「いいえ。聞いていないわ」

聞いているも何も、私は先ほどの寝台の上で目覚めるまでの記憶は持ち合わせていないのだ。残っているのは嫌な辛い記憶だけ。だがそんなことはおくびにも出さず言葉を返す。

「では朝食の後にきつとお話がございませうね。急いでお支度を済ませてしましましょう」

確かに父からまだ話は聞いていない。

しかしそれが何の舞踏会を意味しているのかが、今の私にはわかってしまう。

数か月後にルーズベルク公爵家で開催される予定の、盛大な舞踏会についての話だろう。

なぜこれほど詳細に過去の舞踏会のことを覚えているのか……

それはこのルーズベルク公爵家での舞踏会が、私とエドガー様が出会うきっかけとなった場でもあるからだ。

忘れてくても忘れることのできない、あの日のこと……

私たちの出合いは、私が間違えて強い酒を飲んでしまいそうになったところを、エドガー様が助けてくれたことから始まる。

その日の私は、慣れない盛大な舞踏会で緊張していた。出席者たちと挨拶を交わし、その場にふさわしい振る舞いをするだけで精一杯であったことを覚えている。

得意のはずのダンスも次から次へと申し込みが入り、よく顔もわからぬ男性たちと踊り続けたこ

とで、足はもう疲れ切っていたのだ。

ようやく挨拶回りと終わりの見えないダンスから抜け出すことのできた私は、大勢が集まる大広間の中央を抜けて隅の方へと移動する。

——喉が渇いたわね……確かあの辺りで飲み物を配っていたはず。

大広間を見渡せば、トレーの上にグラスをいくつも載せたものを持った男性がいる。

慣れない場であるため、何かをする時は必ず声をかけるようにと父には言われていたのだが……父は他の貴族たちへの挨拶で忙しいらしく、こちらに戻ってくる気配は全くない。

飲み物のためにわざわざ父をこちらへ呼ぶのも気が引けてしまうし、それくらいなら大丈夫だろう。今思えばそんな安易な考えが、これから始まる全ての悲劇を引き起こすきっかけとなったのかもしれない。

だが当時の私はそんなことなどつゆ知らず……例の男性の元へ向かうと声をかけた。

『一ついただけるかしら』

『はい。どれにいたしましょうか？』

彼はトレーの上がよく見えるようにと、少し屈んでグラスの中身を見せてくれた。

二種類の色の飲み物がそれぞれ注がれており、そのうちの一つはワインであるとすぐにわかる。私は十八歳を過ぎているため、一応酒を嗜むことは可能だ。

しかし一度実家の侯爵家でワインを試しに一口飲んだところ、すぐに酔いが回って気分が悪くなってしまったのである。

それ以降父から酒の類は飲むと言われており、そのことは私自身も重々承知していた。

——これがワイン……ということとは、もう片方のグラスが果実を絞ったものね。

『ワインではない方をいただきましたいわ』

『かしこまりました』

私はトレイの上から、ワインではない方のグラスを取った。

人混みで飲み物をこぼしてしまわないように、再び隅の方へと移動する。

そして壁にもたれかかりながらそのグラスに口をつけようとした、まさにその時であった。

『待つて。それは酒だ』

そんな声と共に、突然グイッとグラスを持った方の手首を掴まれる。

あまりに急な出来事で、私には何が起こったのかわからない。

『え……あなたは……？』

ハツとして声の方を見上げると、そこには銀髪に透き通るような碧眼を持った見目麗しい男性が立っていたのだ。

——こんなにも素敵なお方がいるのね……

ぼうっと彼の姿に見惚れているうちに、その男性によってグラスが奪われてしまう。

『これは果実水でも果実の搾り汁でもない。果実の風味で甘くした酒だ』

『え……』

『君は酒が苦手なのでは？』

『な、なぜそれを……』

この男性と顔を合わせるのこれが初めてだ。

彼はなぜそのようなことを知っているのだろうか？

私の訝しげな視線に、男性は少し困ったような微笑みを浮かべながら話を続ける。

『ずっと君を見ていたから。ワインではない方がいいと言っていたらどう？』

『あ……』

『もう片方の酒は甘さがあつて飲みやすい分、かなり酔いが回りやすい。君のような年若い令嬢が、あのような強い酒を好むはずがないというのはわかる』

淡々とそんなことを述べる目の前の男性から目が離せない。

『あそこは酒を飲んで羽目を外したい者たちのための場所だ。君のような女性が行くところではない』

『私、知りませんでした……』

思えばこれまでの舞踏会は全て父や母について回っており、そのようなことを知る機会はなかった。両親たちもその件に関して触れることはなく、まったくの無知であったのだ。

『きつとご両親は、年頃の君にはあまり教えたくないと思ったのかもしれない。飲み物をもらうなら、向こう側に立っている女性から受け取るといい。私が今取ってきてあげよう』

『いえっ……見ず知らずの方にそこまでしていただくのは』

『君は私のことを知らないのか？』

『へ？』

よく意味のわからない返しをされ、気が抜けた声が出てしまう。

『……まあいい。君の名を覚えてくれないか』

本来ならば、相手が名乗ったことを確認してから自らの名を明かすように、と父に言われていた。だが彼は恩人だ。

——どう見ても、悪いお方のように思えないし……

『フローラ……フローラ・ウィルソンと申します』

気づけば、自らの名を口にしていた。

彼はその名を聞くと、顎に手を当てて少し考えるような仕草を見せる。

『ふむ……ウィルソン侯爵家の令嬢か……』

『あの、あなた様のお名前は？』

『私はエドガーだ。では、飲み物を取ってくるとしよう。いいか？ 必ず動かずにそこにいますぞ』

彼は家名を名乗らなかった。しかしこの舞踏会に参加しているということと、その煌びやかな身なりや風貌から、どこかの貴族であるということは間違いないだろう。

結局果実水を取ってきてもらい、それを受け取ったところで彼はその場を立ち去っていった。

『またすぐに会えるだろうから、今日のところはこれで』

そんなよくわからない台詞を残して。

これが、私と最愛の夫であるエドガー様の出会いであった。

後日ウィルソン侯爵家に届けられた手紙により、彼がコルドー公爵令息であったのだということを知る。

——ということは、そもそも舞踏会に参加しなければエドガー様と出会うこともないのね？

彼と出会ったきっかけをなくしてしまえば、きっとこれから先私たちの人生が交わることもなくなるはずだ。

私たちは、もう絶対に出会ってはならない。互いに結ばれるべき相手は違ったのだから……



「だめだ。あの舞踏会は国の主要な貴族たちが皆招待されているもの。我が家から欠席者を出すなど、言語道断」

「ですがお父様、私一人が欠席したところで誰もお気づきになりませんわ」

「そういう問題ではない。お前は自分がウィルソン侯爵家の一員であるという意識が低いのではないか？」

あれから両親であるウィルソン侯爵夫妻の元に呼ばれた私は、舞踏会を欠席したいと申し出た。しかしその結果がこれだ。普段は娘に甘い父にしては珍しく、その意志は頑（かた）なであった。

そしてそんな父を、母が困ったように見つめている。

——さすがにそううまくはいかないものなのかもしれないわ。

前回と同じように進もうとしている人生を無理やり変えようとすることは、きつと並大抵の努力では難しいのだろう。

だがそれでも、私は諦めるつもりはなかった。

「フローラ」

黙り込んでしまった私を見て、少し厳しく言い過ぎたと思ったのだろうか。

突然これまでの声色とは打って変わって優しく名を呼ばれ、正面に腰掛ける父の方へと視線を向ける。

「この舞踏会は、お前の婚約者探しも兼ねているのだよ。お前ももう十八だ。立派な貴族の元へ嫁いで幸せになってもらいたい」

「私は結婚はまだ……」

この台詞も、もちろん一度目の人生とは違うものだ。

案の定、両親たちは私の反応に戸惑いの色を隠せないでいる。それもそのはずだろう。

以前の私は、舞踏会で運命の男性と出会い一刻も早く幸せな家庭を築くことを夢見ていたのだから。父からの舞踏会への打診に張り切って頷いたことを、昨日のことのように覚えている。

——ですがお父様。私はこの舞踏会で愛する人を見つけて結婚したけれど、うまくいかなかったのです……

幸せだったのは最初だけで、長く苦しい日々だった。

しかしそんなことを今の父に言ったところで、わかってもらえるはずもない。

「そう言っているうちに、将来有望な者はどんどん他の令嬢たちと婚約を結んでしまうぞ。せめてどんな男性が参加しているか、それくらいは見えておきなさい」

「お父様……」

「いいかいフローラ。これは父としてだけでなく、ウィルソン侯爵としての命でもある」

そう言われてしまつては、もはや私に断ることなどできるはずもない。

——舞踏会から逃れることはできないみたいね。でももう絶対に、飲み物を選び間違えたりはしないんだから。

エドガー様と知り合うきっかけとなったあの出来事が起きなければ、たとえ舞踏会に参加したところで彼と出会うことにはならないはず……

そう考えた私は、洪々と父の命に対して頷いた。

「わかりましたわ……舞踏会に参加いたします」

「わかってくれればいい。舞踏会までまだ少し時間がある。ドレスなどもキャロルと相談して決めておくんだよ」

父は私の返事を耳にした途端、につこりと微笑みながらいつもの娘に甘い父へと変貌を遂げたのである。

「侯爵様は舞踏会について、何かおっしゃっていましたか？」

父の執務室を出て自室へと戻ると、待ち構えていたキャロルからそんなことを尋ねられた。

「欠席してもいいかと尋ねてみたら、珍しく怒られてしまったわ」

「まあ、舞踏会を？ 一体なぜそのような……以前からお嬢様は、素敵な男性と結婚して家庭を築かれることを楽しみにしておられましたのに」

私の答えを聞いたキャロルは、先ほどの両親と同じく驚いたように瞳を丸く見開く。

彼女がそう思うのも無理はない。舞踏会は貴族の男女の出会いの場なのだから。

昔は家同士が決めた見合い結婚が貴族の主流であった我が国でも、今では恋愛を経て自然な形で婚約を結ぶ男女が見られるようになった。

舞踏会で言葉を交わし、文通などを続けた上で後日改めて顔合わせをおこなうのが一般的だろうか。

貴族の娘は基本的に舞踏会や茶会などがなければ、屋敷から出る機会ほとんどないに等しい。それは私にも言えることであり、そうなる貴族男性と知り合う機会などそうそう生まれるはずもないのだ。

だというのに以前から幸せな結婚を夢見ていた主人が、突然その出会いの場である舞踏会を欠席したいと言い出した。

しかも舞踏会を主催するのは、この国でも大きな力を持つ高位貴族のルーズベルク公爵家である。国中の貴族たちが一堂に会する貴重な一晩となるに違いない。

「結婚に焦りを持つのは、あまりよくないと思うようになったの……」

「なぜそのような……？」

再びキャロルに尋ねられた私は、思わず言葉に詰まってしまった。

——あなたが昨日まで見ていた私と、今の私は別人なの……なんて言えるわけがないわね。

先ほど目を覚ました時点で、昨夜までのウィルソン侯爵令嬢としての私は死んだのだ。

ここにいるのは一度目の人生の記憶を持つ、元コルドー公爵夫人としての私である。

「結婚は人生で一度きりのものでしょう？ 早まった真似をして、後でやっぱり違った……なんてことになったら困るもの」

この国では離縁はよほどの理由がなければ認められておらず、女性の方から離縁を申し出るということもよしとはされない風潮がある。

だから私も、エドガー様とナターシャの姿をコルドー公爵夫人の立場から黙って見つめることしかできなかったのだ。もっと簡単に離縁することができていたならば……心が引き裂かれてしまう前に、身を引くことだってできていたかもしれないのに。

そうしたら、今頃こうして死に帰るようなこともなかったはず。

「……様。フローラ様」

「えっ……ああ、ごめんなさい」

「本当に今日はどうなさったのですか？ まるで別の方がフローラ様になられてしまったような……」

変なことを言い出したかと思えば突然黙り込んだりと、今日の私は確かに様子がおかしいだろう。

「……私ももう十八だし、色々考えることがあるのよ」

「はあ……左様でございますか」

苦し紛れのそんな言い訳に、キャロルは腑に落ちないといったような表情で頷いたのであった。



舞踏会までまだ日はあると思っていたが、そういう時ほど月日の流れを早く感じてしまうもの。色々と人念に支度を整えているうちに、あつという間にルーズベルク公爵家での舞踏会の日を迎えてしまった。

「やはり私は青い刺繍の入った水色のドレスの方が、お嬢様の髪の色と合っていてよくお似合いかと思うのですが……」

「もう、キャロルったらいい加減しつこいわよ。そのドレスにはしないと、随分前から言っていたじゃない」

自室で舞踏会用のドレスへ着替えた私を見たキャロルは、納得がいつていない様子でそんなことを何度も口に出している。

「確かにそうでございますが、何もそのようなお色になさらずとも……せつかくの美しいお顔を引き立てるためにも、華やかなドレスにした方がよろしいのでは？」

まあ確かにキャロルがしつこく食い下がるのも、無理はないのかもしれない。

なぜなら私が今晚の舞踏会のために選んだドレスは、濃紺の至ってシンプルなデザインのものであったから。刺繍はおろか、レースなどの装飾もほとんど施されてはいない。

一応これでも実家は侯爵家であり、高位貴族の部類に入るだろう。

まだ嫁ぐ前の、社交界デビューを果たしたばかりの令嬢が着るドレスにしては、あまりに地味すぎる。もちろんそんなことは私も十分承知していた。

ちなみに一度目の時は、キャロルが勧めていた水色の生地^{はだか}に青の刺繍が華やかなデザインのドレスを着て、舞踏会に参加したことを覚えている。

だからこそ、なんとしてもそのドレスは避けなければならないのだ。

——絶対に……絶対に今度こそはエドガー様と出会いたくないの。

今のうちに、少しでも不安要素は減らしておきたいというのが正直なところで……

はつきりとした正解はわからないが以前と真逆の行動を取り続ければ、やがて人生も一度目のものとは違った道に切り開かれるのではないかと私は考えている。

とにかく今晚の舞踏会では目立たぬように壁際でひっそりと時間を潰して、無事にウィルソン侯爵家の屋敷へと帰宅することを目標としよう。

この濃紺の地味なドレスならば私の生来の黒髪と相まって、きっと周囲の華やかさにかき消されてしまうはずだ。

そして何より、父から離れて一人で行動することは避けなければならない。

どれほど参加者たちへの挨拶が億劫だったとしても、どれほど途中で疲労を感じたとしても、絶対に一人にはならないと決めていた。

これは、エドガー様の方から私に話しかける隙を与えないようにするためだ。

「……では、せめてリボンはこちらの明るいお色を……」

「いいえ。リボンもこの紺色のものにするわ」

^{すが} 絶るような眼差しを向けながら差し出された薄桃色のリボンを、私はあっさりと断った。

その意志は固く何を言っても無駄なのだと思ひ知らされたキャロルは、ため息をつきながら私の髪を梳かし始める。

「わかつておりますよ。お嬢様が一度言い出したら、周りの意見はお聞きにならないことくらい」

「さすがはキャロルね」

「そのようなことで褒められても、全く嬉しくはございません！」

キャロルは唇を尖らせて不服そうな顔をしているが、私にとってはこの何気ないやり取りがとてもなく幸せに感じられるのだ。

——コルドー公爵家に嫁ぐ時に、キャロルと一緒にきてくれたなら……

今さら考えてもどうしようもないことが頭をよぎった。

当時の私は、慣れない環境にキャロルを連れていくことへの申し訳なさを感じていた。

そしてコルドー公爵家の古参の侍女たちからの視線が怖く、彼女を公爵家に連れていきたいと提案することはなかったのだ。

エドガー様の方からも、公爵家のしきたり故にウィルソン侯爵家から誰かを連れてくることは難しいかもしれないと言われていた。

もちろんその条件を理解し、納得して彼の元へ嫁いだつもりであつたのだ。

しかしその結果、公爵家の中に心から信頼のできる者などいないに等しく、ナターシャがやってきてからその状況はさらに悪化した。

結婚してすぐにエドガー様がアリアを私付きの侍女としてくれ、比較的彼女とはいい関係を築くことができていたと感じている。

しかし、やはりキャロルの代わりとなることはできなかった。

あの時キャロルがそばにいてくれたなら、彼女は周囲の敵意からきつと私を守ってくれたに違いない。

そんなことを考えていると、なんだか鼻の奥がつんと痛んで視界がぼやけそうになる。

だが私は、唇を噛んでなんとかそれを必死に堪えた。

ここで涙を流すような真似を見せてしまつては、今度こそウィルソン侯爵令嬢は気が触れたとキャロルに思われてしまう。

「今夜の舞踏会で、素敵なお相手が見つかることをお祈りしています」

キャロルは耳の高さで私の髪を一纏めにすると、ドレスと同じ濃紺のリボンでそれを結んだ。

首元はすっきりとしたものの胸元の開きが少ないデザインドレスでは、いささか寂しく見えてしまうが仕方がない。

キャロルからは何度も「首飾りを……」と勧められたが、私はそれも断った。

——今夜はお父様の命で参加するだけ。目立つわけにはいかないの。

ウィルソン侯爵である父の顔に泥を塗らないために参加するだけであり、今晚の舞踏会で未来の夫を見つけるつもりは今の私には毛頭ないのだ。

支度を終えた私は、キャロルの先導で両親の待つ屋敷の玄関へと向かう。

その足取りは重く、これから待ち受ける舞踏会がどのような結末で幕を閉じるのか、恐ろしくてたまらなかった。

「おおフローラ……なんだかドレスのせいかな、かなり大人びて見えるな。それにしても少し色合いが落ちてきすぎなのではないか？」

ようやく到着した私の姿を一目見た父までもが、キャロルと同じようなことを口にする。

その様子に、なんだか張り詰めていた気持ち少しずつ緩んでいくのがわかった。

「キャロルにも同じことを言われましたが、私は今晚の舞踏会で目立ちたいという気は一切ございませんで」

「先日 の件を怒っているのか？」

「いいえ、まさかそのような。お父様のおっしゃることも確かにその通りですもの」

父はそれ以上は何も言わなかった。

そんな私たちの様子を、父の隣に並ぶ母が困ったような顔で見つめている。

「とりあえず、早くルーズベルク公爵家へ向かわねば」

その言葉を合図に御者の手で馬車の扉が開けられると、まず私が先に乗り込むようにと両親に促される。

そして私が腰を下ろしたことを確認すると、彼らも向かい合うようにして馬車へと乗り込んだ。

——頑張るのよ。今夜を乗りきれば、幸せな二度目の人生が待っているわ。

私がそんな決意を秘めているということを、両親は知りもしないだろう。

やがて到着したルーズベルク公爵家の屋敷は記憶の中のものとさほど変わっておらず、豪奢で盛大な舞踏会であった。

少し支度に手間取ってしまったこともあり、私たちが足を踏み入れた頃には既に大勢の貴族たちが集まって歓談を楽しんでいる様子。

父と母はそれぞれ分かれて行動をするらしく、私は父の後をついて回るよう命じられた。

見れば貴族夫人たちは集まってそれぞれに会話を楽しんでいるようで、私と同じように父親に連れられた令嬢たちが挨拶回りに付き合われている光景が目に入る。

きつと彼女たちも、婚約者探しの真っ最中なのだろう。どの男性が自分の娘にふさわしいか見定めている父たちの姿は、まさに静かな争いに身を投じているかのように見えた。

「フローラ、ご挨拶を」

迎いをキョロキョロと見渡していた私に、父が呆れたようにそんな声をかける。

——本当は、まだ結婚なんてするつもりはないのだけど。

二度目の結婚は、前回の失敗を生かして入念な計画を立ててから決断すると決めている。愛だの恋だのそのようなものにうつつを抜かしているから、裏切られた時の苦しみも深くなるのだ。最初から条件ありきで相手を選べば、たとえ何かが起きたところで私自身の気持ちも割り切ることができるはず。

そんな思いを抱えながら父に促された通りに挨拶をしようと、向かいに立つ男性の方へと顔を向けたのだが……

「っ……!？」

あまりの衝撃で、息が止まるかと思った。

「な、なぜ……なぜあなたが……」

「フロラ？ どうした、失礼にあたるぞ。早くご挨拶をしなさい」

「いや、ですが……はい……」

目の前にいたのは、なんと以前の夫であるエドガー様その人であつたのだ。

以前は後ろへと撫でつけられていることの多かった前髪が下ろされているせいか、記憶の中の彼よりも幼い印象を与える。

とはいえ貴族男性の正装に身を包み優雅に微笑むその姿は、相変わらず社交界でも注目を浴びているに違いない。

だがすっかり忘れていたのだ。今ここで私たちは初対面ということになっているではないか。慌ててカーテシーをするが、心臓が恐ろしいほどの速さで鼓動を刻んでいる。

不自然な態度を取ってしまったていないか、途端に不安になった。

——なぜ……一体なぜエドガー様がここに？

こんなことは予想していなかった。

もちろん彼もこの舞踏会に参加していることはわかっていたが、一度目の時は最初の挨拶の際に彼の姿はなかったはずだ。

「は、初めまして……ウィルソン侯爵の娘フロラと申します。見苦しいところをお見せしてしまいました」

おどおどと挨拶する私の姿を目にしたエドガー様は、目を細めてフツと笑った。

久しぶりに見た懐かしいその表情に、幸せだった頃の記憶へ引き戻されてしまいそうになるのを必死に堪える。

「そのようなことは気にしていない。私のことは知っているか？」

「は……いいえ。申し訳ございません……」

本当は知っている。

知っているという言葉などでは不十分なほどに、彼のことならわかっている。

だが私は死に戻り、新たな人生をやり直そうとしているのだ。

咄嗟に彼の問いに対して肯定しそうになってしまった自分を、こっそりと心の中で叱る。

「そうか……」

エドガー様は私の発言を聞くと、なぜか一瞬悲しげな表情を浮かべた。

おや、と思つてその顔を見つめ直すと、今度は困つたような笑みを浮かべている。その顔には先ほどの悲しげな様子は残っていないかった。

きつとエドガー様は、自分のことを知らないと言われて動揺したのだろう。それもそのはず。コルドー公爵家といえ、今夜の舞踏会の主役であるルーズベルク公爵家と並ぶ我が国きつての高位貴族だ。

王家にも連なる高貴な血筋に、一族は揃いも揃つた美貌の持ち主であると有名で、エドガー様も噂に違わずその美しさを引き継いでいる。

そんな彼が、社交界で話題にならないはずはないだろう。以前の私はそれでもエドガー様のことを知らなかったのだから、本当にあの時の自分の無知さには呆れてしまう。

「これ、フローラ！ 申し訳ございません、エドガー様」

エドガー様のことを知らないと言つた娘に対して、父は顔面蒼白となつて謝罪しようとするがそれを制される。

「いや、構わない。初めましてフローラ嬢。私はエドガー……コルドー公爵家の息子だ」

「まあ……それはご無礼を……お許しくださいませ」

我ながら迫真の演技ではなからうか。

白々しくそんな嘘をついて頭を下げた私を、エドガー様が上からじつと見つめているのがわかつた。

「え、エドガー様！ また後ほどご挨拶に伺いますので、これにて一旦失礼いたします」

気まずい空気が、慌てた父の裏返つた声により断ち切られる。

「もう行つてしまうのか？ まあ仕方ない。フローラ嬢、またの機会に」

「……いえ……はい。失礼いたします」

こうして私は父によつてエドガー様の元から半ば強引に退場させられたのである。

またの機会など、あつてはならないのだ。

だが縋るような眼差しでそう告げられ、戸惑つてしまったのもまた事実であり……

私は悶々とした気持ちを抱えたまま、大人しく父のあとを追う。

やがて少し人混みが落ち着いている場所までやってくると、父は突然ハンカチで額の汗を拭き始めた。

「コルドー公爵令息相手に顔を知らないなどと……私は生きた心地がしなかつたぞ」

「これまであまり舞踏会には参加してこなかつたんですもの。ですがこれを機に、もう少し社交界のことも勉強するように努力しますわ」

「そうしておくれ。これでは婚約者が見つかるかどうか……」

「私は別に結婚には焦っておりませんので」

婚約者など、当分見つからなくていい。

せめてエドガー様が、誰か別の女性との婚約を発表するまでは……

彼の幸せそうな姿をしっかりと目に焼きつけて、一度目の人生で報われなかった私の思いを消化させてやりたいと思つていた。